

## バードウォッチャーによる集団形成について

### Research of Group Development of Birdwatchers in a Field

高橋 正弘\*

TAKAHASHI Masahiro\*

\*大正大学

〔要約〕都市近郊の公園等に参集する自然愛好家の数は、自然意識や環境意識の増大に伴って近年増加してきていると考えられる。これら自然愛好の人々が、実際の環境保全や持続可能な開発の達成にどう貢献しているのかについては依然不明な点が多い。これらの自然愛好家たちがどのように集団や社会を形成しているのか、その集団や社会をどう評価できるか、といった点に注目し、実際に多くのバードウォッチャーが多く集まる特定のフィールドで、調査者も一バードウォッチャーとして振る舞いつつ、どのような集団が形成されているかについて観察と分析を行った。半数以上のバードウォッチャーが異人である調査者に対して何らかのコミュニケーションを求めているということ等の結果から、出入が自由な森林ではあるものの、当該フィールドを拠点として、バードウォッチャーの集団化が行われているということ、そしてその集団は二次集団であると推察できる、という結果を得た。

〔キーワード〕自然愛好家、集団、ナチュラルリスト、バードウォッチャー

#### 1. はじめに

近年、例えば都市近郊の公園などでも、趣味としての「自然観察」を行っている人々を多く見かけるようになってきている。また自身の自然観察体験やそこで撮影された写真をインターネット上のホームページやブログ等を通じて手軽に発表する人が増えてきている。これらの自然愛好家たちは、自然意識の高まりや、環境意識の増大に伴い近年増加してきていると考えられる。特に、観察や識別・同定に際して一定のスキルが要求されるバードウォッチャーや昆虫観察、植物観察等の趣味を持つ人の拡大は顕著であり、これらの自然愛好家については、一般的に高い環境意識を持つと考えられる。これらの増加しつつある自然愛好家たちが集団化し、特定のもしくは限定された地域での環境保全や持続可能な開発の問題に関心を持って関与することになった場合、一定程度の影響と効果をもたらすと

考えられる。

ところでこれらのいわゆる自然を愛好する人々が、実際の環境保全や持続可能な開発の達成に果たして貢献しているのかについては、依然不明な点が多く、環境意識の高さと趣味としての環境への態度との関係については解明されていない。また、自然愛好家が増加しつつある状況であるといっても、個々人の趣味として自然愛好に参加する人々がどのような集団を形成する可能性があるのか、そしてそのような集団はどのような自然保護観を成員に対して期待するのか、といった点についての解明はまだの様相である。

そこでこれらの自然愛好家たちが、実際にどのような集団や社会を形成しているのか、もしくは形成していないのか、集団が形成されているとすれば、そのような集団が持つ社会性はどのようなものなのか、といった点に注目し、自然愛好家たちが具体的にどのよう

な集団を形成しているかを明らかにするための試みを課題として設定した。

## 2. 研究方法

上述の課題にアプローチするため、本研究の仮説を、「自然環境保全への志向が高いと考えられるナチュラリストは、特有の特徴を備える集団を形成する」とする。ただし、「ナチュラリスト」というカテゴリーは非常に幅広い概念であり、さまざまな自然愛好活動に参加する人々をひと括りにすることは、データ収集上も分析上も困難である。そのため、この仮説に一定の留保を付し、本研究においてはナチュラリストを「バードウォッチャー」に限定することとする。

本研究で用いるデータは、実際に多くのバードウォッチャーが集まる特定のフィールドに複数回通い、調査者も一バードウォッチャーとして振る舞いつつ、当該フィールドにおいてバードウォッチャーの集団が形成されているか否かを観察したものを用いる。データ収集に際しては、当該フィールド内において野鳥観察をしながら極めて低速度で歩き、その間に調査者と「出会い」(ゴッフマン 1985)をおこなった他のバードウォッチャーが、調査者に対してとった態度と、その同行者の数や装備品を書き留めていった。

フィールドでの調査時には、調査者自身が他者から必ずバードウォッチャーとして認識されるよう、首に双眼鏡を下げ、三脚と望遠鏡を持ち、茶系統の地味な服装を着用した。また調査期間中、調査者は当該フィールドでは「異人」、すなわちストレンジャーとして振る舞うよう心がけた。

当該データの収集を行うフィールドとしては、埼玉県さいたま市桜区に位置し、荒川河川敷に設置されている秋ヶ瀬公園内の「ピクニックの森」とした。ピクニックの森は約6ヘクタールのハンノキを含む森林で、階層構造が発達した二次林であり、都心に近くてア

クセスが良いため、春秋の渡りの時期、特に週末や祝日に多くのバードウォッチャーが集まる場所である。またミドリシジミの生息地として蝶の愛好家達にも良く知られており、さらにチョウジソウやサクラソウなどの希少植物もフィールド内外に生息している。

データ収集は、2009年3月末と4月上旬に2回の予備調査を行って収集するデータ項目の検討を行い、2009年4月中に3日間、合計5時間25分間、データ項目に即してデータの収集を行った。

## 3. 結果

データ収集の結果は、表1に整理したとおりである。

3日間の調査中に、調査者が当該フィールドで出会ったバードウォッチャーは、25グループ、合計31名であった。

何らかの野鳥の撮影用機材を持った者は23名で、単に野鳥の観察のみを目的としたとみられる人は8名であった。これら25グループ31名の委細については、以下のようにさらに整理できる。

単独・グループの別については、全25グループ中、単独が19人、グループが6組12名であった。したがって、半数以上が単独で行動をしていた。

男女の別については、31人中、男性が26人、女性が5名であった、圧倒的に男性が多く、女性が少ないこと、また単独で行動している女性は皆無であった。

フィールドでの行動として、撮影もしくは観察のどちらを行っているかについては、31人中、撮影は23人、そのうちデジスコもしくはビデスコを使用している人が8人、観察のみは8名であった。つまり写真等のメディアに記録を残そうとする人が多く、観察のみを目的とする人は少なかった。また撮影を行う人の半数程度は、高級機器ではなく安価な撮影機材を用いる人であった。

フィールド内で、異人である調査者と出会ったもしくはすれ違った際の態度の分類については、31人中、調査者と会話をした者は6名（そのうち言葉で挨拶したのみは2名）、会釈の挨拶をした者は13名、調査者を全く無視した者は12名であった。したがって、半数以上が異人である調査者に対して何らかのコミュニケーションをとったが、調査者を完全に無視する人も、40%弱の割合で存在した。

表1 フィールドにおけるバードウォッチャー  
2009年4月19日(日)07:10~08:50

No.	性別	接触の際の態度	持ち物	行動
1	男性	無視	手持ちカメラ	単独
2	男性	無視	三脚+ビデオ	単独
3	男性	会釈	三脚+デジスコ	4と一緒に
4	女性	会釈	三脚+デジスコ	3と一緒に
5	男性	会釈	三脚+一眼デジ	6と立ち話
6	男性	会釈	鳥バッチ(何も持たず)	5と立ち話
7	男性	会釈	一眼望遠	単独
8	男性	会釈	デジスコ	単独
9	男性	会釈	一眼望遠	単独
10	男性	会釈	一眼望遠	単独
11	男性	会釈	双眼鏡	単独
12	男性	会釈	手持ちカメラ、双眼鏡	単独

2009年4月26日(日)06:30~08:40

No.	性別	接触の際の態度	持ち物	行動
1	男性	会話	手持ちカメラ、双眼鏡	単独
2	男性	会話	デジスコ	2と一緒に
3	女性	会釈	望遠鏡	3と一緒に
4	男性	無視	望遠一眼	単独
5	男性	会釈	一眼望遠	6と一緒に
6	女性	無視	デジスコ	5と一緒に
7	男性	会話	デジスコ	単独
8	男性	無視	双眼鏡	9と一緒に
9	女性	無視	双眼鏡	8と一緒に
10	男性	挨拶	デジスコ	単独
11	男性	会話	一眼望遠	単独
12	男性	無視	一脚望遠一眼	単独

2009年4月29日(祝)09:05~10:40

No.	性別	接触の際の態度	持ち物	行動
1	男性	無視	一眼望遠	単独
2	女性	挨拶	手持ち望遠一眼	3と一緒に
3	男性	無視	望遠鏡	2と一緒に
4	男性	無視	双眼鏡	単独
5	男性	無視	望遠一眼	単独
6	男性	会釈	デジスコ	単独
7	男性	無視	望遠鏡	単独

#### 4. まとめ

以上の結果から、バードウォッチャーとして振る舞うナチュラルリストには、単独者が多く、また男性が多かった。そして撮影を目的

とした人が観察のみを目的とした人より多かった。またバードウォッチャー同士では、ごく簡単なコミュニケーション(会釈・挨拶等)が多くとられていた。つまり異人である調査者に対して、半数以上が何らかのコミュニケーションを求めてきており、したがって出入が自由な野外の森林ではありながら、当該フィールドを拠点として、何らかのバードウォッチャーの集団化が進んでいる可能性がある程度推認できた。しかし集団化のレベルについては、確固とした組織がすでに出来上がっているわけではなく、極めて緩やかなネットワークであった。またそれは恒常的な集団ではなく、反対に刹那的な集団と見てよいものであった。したがってフィールドで形成されるバードウォッチャーの集団の特徴は、集団成員間に存在する連帯感と一体感などを特徴とする「一次集団」ではなく、特定の利害関心、この場合野鳥観察・撮影という興味に基づいて組織され、成員の間接的な接触を特色とする「二次集団」であると判断できる。

自分が観察・撮影したいと望む野鳥の発見や識別(同定)に際して、経験者やそのフィールドを良く知る他のバードウォッチャーの知識に依拠したいという願望、もしくはバードウォッチャーとして初心者であったり、当該フィールドにまだ十分馴染みがなかったりする人の場合、その場に形成されているある準拠集団に対して、何らかの情報の提供や判断等を求めることがあり得る。その場合、バードウォッチングという行為によって形成されるのは、特定の関心事に基づいて作られる緩やかなネットワークとしての二次集団であるから、その内部でとられるコミュニケーションも、握手や抱擁といった親密なものではなく、会釈や一言で済まされる挨拶程度であったとしても、それを糸口としてその時点で自分が望む情報や判断を得られるかもしれないため、十分なものであると考えられる。

以上から、本研究の仮説で提示した「特有

の特徴」を持つバードウォッチャー集団の性格の一端を明らかにすることができた。

## 5. 考察

フィールドにおけるバードウォッチャーの集団形成については、それが二次集団とみなす可能性を指摘したが、フィールドにおけるバードウォッチャーの半数以上が単独で行動しているのは、バードウォッチングという自然愛好の活動が、組織的なものではなく、極めて個人的な趣味のレベルであると捉えられているからと考えられる。一緒に野鳥を観察したり撮影したりするグループも形成されてはいる模様だが、それでも少人数のグループの割合が多い（今回の調査では最大が2人のグループのみ）ことから、バードウォッチャーのそれぞれが、このフィールドに形成されたバードウォッチャー集団の構成員としての認識を、極めてあいまい、もしくは集団の構成員としての自覚を無きものとしている状況が予測される。そのため、調査者が認知した集団の存在と、フィールドでバードウォッチングをしているバードウォッチャーの集団への意識的な帰属意識とは、まったく異なったものとなる。

またフィールドでのバードウォッチャーに男性が多く、特に女性の単独者が見られなかったということは、バードウォッチングという行為が男性をより惹きつけるタイプの余暇活動であり、さらには野外における自身に対する危険回避や対応の中で性差による嗜好の好嫌の現出が背景にあると推察できる。またバードウォッチャーの集団に中での世代的な属性に注目すれば、年配者と見られる層が比較的高級な撮影機材を所持して、フィールドで撮影を行っている。これらの世代はおそらく経済的に比較的余裕のある層であり、また野外での撮影が偶然の要因に左右される時間のかかる行為があることから、退職者やそれに準じた人々が多いということも考察するこ

とができる。また「デジスコ」と呼ばれる望遠鏡とデジタルカメラをドッキングさせた安価で望遠撮影ができる手法が開発され、普及していったことが、高級な機器に頼らずとも野外での野鳥撮影に関心を持つ者の増加に寄与していると考えられる。

なお、数値データからは読み取ることができないが、調査期間中にフィールド内においてバードウォッチャーがどう行動していたかについて、その動きを単純化すると、図1のとおり、散在型と偏在型の2つのタイプが見られた。

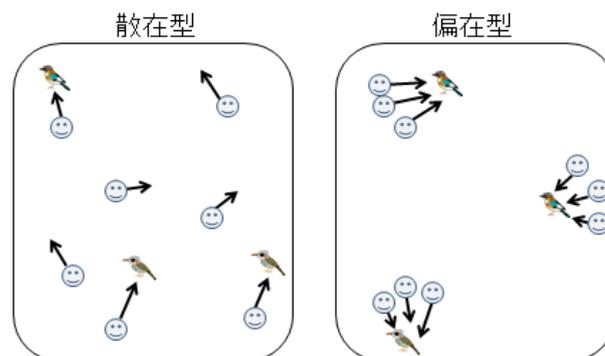


図1 フィールドでのバードウォッチャーの行動

実際は散在型と偏在型の間接的なものがよく見られた。それは多くのバードウォッチャーが散在型でフィールド内に展開していても、野鳥の出現や情報の発信に伴い、短時間で偏在型に変化しやすいからである。この集団内部でのダイナミクスについては、バードウォッチャーの集団形成の在り方の探求とともに、今後の検討課題である。

## 付記

本研究は、2009年7月に開催された日本環境教育学会第20回大会で報告した「ナチュラリストの集団形成に関する研究」を大幅に改定し、新たに分析を加筆したものである。

## 引用文献

E. ゴッフマン (佐藤・折橋訳), 1985, 出会い, 254頁, 誠信書房, 東京.